

## 書 評

金澤周作著『チャリティの帝国——もうひとつのイギリス近現代史』  
(岩波書店、2021年)



田村 俊行(立教大学)

本書『チャリティの帝国』は、著者が大学院生の頃から抱いていた、「チャリティを軸にしてイギリス史を書きたい」という思いをついに結実させたものである。著者はすでに2008年の『チャリティとイギリス近代』(京都大学学術出版会)で、イギリスという国、その社会に横溢するチャリティを膨大な史料から詳らかにし、イギリス近代を理解するうえでチャリティが不可欠の要素であることを示した。今作は、「チャリティの歴史を加味せずにイギリスを理解することは、〔中略〕無謀である」とする著者の歴史観に基づき、イギリスの近現代に焦点をあてながらも、前作にはなかった前近代からのつながり、そして帝国や世界も視界におさめたつくりになっている。チャリティを軸とするみずからの歴史観を遺憾なく投影した「イギリス」を描き起こす今作は、新書というコンパクトなサイズながら、歴史家としてのひとつの到達点を示したと言ってよいのではないか。

以上の説明からは、ともすれば重苦しい印象をもたせてしまうかもしれないが、新書として書かれた本書は、学術的な厚重さよりは、いまの世界を生きるひとりの人間としての著者の願いを感ずることができよう。そのことは、本書全体をつらぬくモチーフとして示された三つの「気持ち」にもっとも特徴づけられる。「困っている人に対して何かしたい。困っている時に何かをしてもらえたら嬉しい。自分の事ではなくとも困っている人が助けられている光景には心が和む」。著者は、施しの与え手、受け手、それが実現している社会に生きる者たち、この三つの「気持ち」を軸に、それぞれの時代の人びとの生の実践を描き出すことで、「イギリス」を理解する視点を提供しようとする。もっと端的に言えば、三つの気持ちの結

節点たるチャリティ<sup>1</sup>が、イギリスの独自性を支える基礎であり、その上に政治・社会がある、となる。

それでは、以下、本書の内容を章ごとに紹介し、その後、気になった点などを述べる。

「はじめに」では、チャリティを軸とした新しいイギリス史像について述べられている。著者は、チャリティがいかにかイギリス社会に根付いているかを示そうと、伝記辞典に登場する「慈善家」たち、史料にあらわれるイギリス人の自己像、そして諸外国の観察者たちの残したイギリス評を紹介する。さらに、2018年時点のチャリティ団体数が16万以上にのぼり、個人による寄付総額で118億ポンドが集められ、イギリス人なら誰もが知る著名なチャリティ団体が数多くあることなどに触れる。そして、チャリティを通して世界中の諸問題に取り組んだイギリスの人びとのありようは、同じ時代に政治・経済・軍事・文化的な影響力を持った「大」英帝国とは異なるもうひとつの帝国、すなわち「チャリティの帝国」として描くことができると主張する。

第1章「世界史における他者救済」では、古典古代から17世紀までの「チャリティ」の積み重なりが示されている。古典古代にはエヴェルジェティスム（恵与志向）と呼ばれる自己本位的「友愛」行為があったが、「神の前の平等」を説くキリスト教の普及により「貧者のケア」を軸とした施しへと変化していった。中世には貧者の救済が神から与えられた試練とされ、施しの積み重ねが自分の死後の救済へつなぐと考えられた。近世近代には飢饉・疫病・戦争など社会不安を背景に、貧者を危険な「浮浪者」とみなし罰する動きが見られ、また宗教改革により分断された西欧ではチャリティ領域に「公」と「私」が芽生え、さらに「自然法」思想の出現は救済の宗教的意味を薄め「公」を前面に押し出すことになったという。このうえに、17世紀以降のイギリス（イングランド）では、不動産を基金とする慈善信託型のチャリティが主流となり、公的な救貧制度を補完したと説明される。

第2章「近現代チャリティの構造」では、チャリティこそがイギリスをイギリスたらしめたものであると主張する。中世由来の議会に主権を委ねる制度と17・18世紀に形成された三層の社会構造の枠組みにこだわるあり方を著者は「変わらないイギリス」と述べ、その根底にはチャリティを含

む「福祉の複合体」<sup>2</sup>があると説明する。この「複合体」には、自助、互助、チャリティ、公的救貧制度が含まれ、自助・互助だけではこぼれ落ちる者をチャリティがとらえ、最後のセーフティネットである公的救貧にするのを予防する重層構造を特徴とする。なかでも著者はチャリティの多様さと分厚さが個人の転落と社会の破綻を防いできたとし、チャリティこそイギリスの基層であると説明する。

第3章「自由主義社会の明暗」では、人道的「慈善家」たちのチャリティが「共同体」の紐帯を都合よく強化する様を説明している。既婚女性の出産支援チャリティは未来の勤勉な労働力を期待する実利的な動機に根差しており、品位ある女性家庭教師の生活支援チャリティは彼女たちの階級的転落を防いだ。また「不良物乞い」の撲滅に勤しむ団体は弱者救済を「無用」と「有用」とに分けた。そして救済者選挙や消費体験イベントなどの寄付者特典は、寄付消費を促した。こうしてエンターテインメント性に惹きつけられた「持てる」人々は進んで寄付し、格差に苦しむ「持たざる」者たちはチャリティを通して救済を受け、共同体は破綻を免れたという。

第4章「慈悲深き帝国」では、広大な領域に君臨する「帝国」としてのイギリスが、世界の「弱者」にどのような姿勢で臨んだのかが説明される。著者はまず詩劇『博愛の帝国』（1822年）に、先頭に立ち世界の範となり弱者を救済するイギリスという自己認識を見る。こうした意識は、非キリスト教圏に文明・平和・キリスト教をもたらさんとするチャリティ団体の保護者的姿勢にもあらわれた。また、イギリス発祥の国際人道支援セーブ・ザ・チルドレンは、活動を批判するイギリス人の説得のために「帝国」としての国際的責任」と「救済は強者の権利」とを強調して自尊心をくすぐったという。ここにも、支配者としての自らの立場に疑念を持たず保護的に「弱者」救済に取り組む姿勢が貫かれている。

第5章「戦争と福祉のヤヌス」では、20世紀におけるチャリティと戦争・国家福祉の相互関係を示す見取り図を示している。第一次大戦期には国の戦時政策に沿う無数のチャリティが出現し、著者はこれを「自発的なチャリティの戦時総動員」と呼ぶ。戦間期には平和ムードの中、国際的組織が目立つものの、ふたたび分断の時代に突入する。しかし、本土空襲などにより第二次大戦中のチャリティは衰微。その後、国家福祉増大によりチャ

リティの役割は減退し、行き場を失ったチャリティの熱意は旧帝国領に向けられ、災害支援や独立国の長期開発援助などに注がれた。しかしサッチャー政権時代の福祉削減政策の中で、また、エチオピア飢饉に際しておこなわれたライブ・エイドがエンターテインメント性をもって若年層をひきつけると、チャリティの重要性はふたたび「発見」される。続くブレア政権（労働党）の「第三の道」と、その後のキャメロン政権（保守党）の「ビッグ・ソサエティの建設」でも公的福祉とともにチャリティへの期待は維持され、2006年には多様化した現代に沿う新たなチャリティ法が制定された。

「おわりに」では、「変わらないイギリス？」と疑問符を添え、イギリス史をダイナミックにするものとしてのチャリティをあらためて強調している。著者は第2章で議会制度と階級社会の枠組みを堅持する「変わらないイギリス」と述べているが、その基層にあるとするチャリティは、近世以降数百年にわたり欧州・帝国・世界との相互作用のなかで姿を変えつつ、柔軟に時代状況に対応してきたと述べる。そして現下の新型コロナウイルス蔓延下での人と世界のつながりに触れつつ、チャリティのこれからについて著者の希望が表明され、本書は閉じられている。

ここまでが各章の紹介となる。

本書は、各時代や状況に照らして著者がまとめた「三つの気持ち」を追うことでダイナミックなチャリティの姿が現れてくる、そんな仕組みになっている。過去に生きた人間たちの、ともすればつかみ損ねてしまいそうな「気持ち」を一人の歴史家が代弁する行為に、読者は戸惑いを覚えるかもしれないが、こうした仕組みを用意できるのも、著者がこれまでに多様で膨大な史資料を渉猟してきたからであり、当然それをまとめあげる力量あつてのことだろう。また、随所に用意された時代背景の説明は読み手の理解を適切に助け、チャリティの具体的な活動や、経済規模を推し量るための数値（とそれをつかむための表、xix頁）など豊富な実例は、その時代の像を浮かび上がらせてくれる。そして本書で語られる内容は、宗教、貧困、市民社会、帝国、戦争、福祉、グローバリズムのみならず、統治、階級、経済、労働、女性、医療、人権、記憶など、多様なフィールドに関心を持つ者に示唆を与えてくれるに違いない。

以上のように、丁寧な仕掛け、多様な具体例、示唆に富む内容で読み手

に満足感を与えてくれる本書であるが、ここで、評者が気になった点を二つ指摘しておきたい。

本書はその主題にもあるように、「帝国」領域におけるチャリティのあり方や役割がひとつの重要な要素となっていることは間違いないであろう<sup>3</sup>。とくに第4章第2節「帝国とチャリティ」は医療宣教、アボリジニ保護協会などの例からチャリティの与え手を理解することができるものとなっている。ただし、「受け手」については必ずしもそうとはいえない点に注意したい。医療宣教の受け手の中には改宗したものもいるが、少なくとも本書は、彼らの思いを伝えてはくれない。アボリジニをヨーロッパの悪徳から「保護」しようと色めくイギリス人に対し、アボリジニの首長層のなかにも協力者が出たとあるが、それはどうしてか。インド北部ドアーブ地方の現地インド人エリートたちは、彼らの伝統的な施しの実践よりもチャリティを上位に置く価値観を内面化していったとあるが、なぜか。

こうした受け手の「気持ち」が、十分には説明されていないのである。おそらく著者自身もその点に自覚があるようで、帝国におけるチャリティの受け手の気持ちについて、政治・経済的支配の現実などとは別次元の論理で「受け入れられたのではないか」(傍点評者)と留保をつける。なお、受け手の「気持ち」に留保をつけているのはここだけである<sup>4</sup>。著者は「あとがき」の中で、「もっとも接近困難なのは、与え手ではなく受け手の経験の理解である」と述べ、また2008年の前作においても、「支配される側における主体性は興味深い論点だが、これは現地社会の構成、世界観、価値体系などを踏まえた分析をする必要があり、それは筆者の能力を超える」としている。しかし、書名に現れる「帝国」から想像するように、やはり現地受け手の主体的な経験や思いへの接近を期待した読者も多かったのではなかろうか。さらに言えば、受け手たちはその後、受け取ったものをどうしたのか。継承し新たな伝統と化したのか。ナショナリズムの中で放棄し、もはや顧みられることはなかったのか。それとも柔軟に形を変え、今に活着しているのか。帝国領域におけるチャリティのダイナミズムは、実はまだ底が知れないのかもしれない。

次に気になった点は、全体を通して、チャリティ財源が、多様で柔軟なチャリティという本書の文脈から切り離されているように思えることであ

る。もちろん財源への言及がまったく無いわけではなく、たとえば第2章第3節「チャリティ」では慈善信託チャリティについては基金(土地とその地代収入)による運営であり、篤志協会チャリティは「主にその寄付金」との説明がある。第4章第3節「どういう金でチャリティをするのか」では、「非人道的」な商売で富を得た者たちによる寄付とその評価に焦点が当てられている。また、バザーの収益や団体特製のグッズ販売、参加費を要するチャリティ・イベントの売り上げも財源になったようで(132~133頁)、その戦略に株式会社との類似性を指摘するのも興味深い。そして、二つの戦争と福祉国家化はチャリティに国家補助金をもたらし、チャリティはその中で命脈を保ったという(208、214頁)。このように、財源への言及は散見される。しかし、その構造を通時的に説明する部分は見当たらない。

ここで参考までに2008年の文献を見ると、19世紀後半の篤志協会型チャリティの収入内訳が示されており、そこには寄付金収入が40%、経営収入が38%、補助金が10%、雑収入が1%とあり(64~66頁)、経営収入はさらに有価証券、入所費、地代、営業収益、配当金に細分される。いかに多様であり、そして割合を見ても寄付金だけに頼り切っていなかったことが分かる。データは示されていないが、おそらく戦後も多様であることに変わりはなく、状況に応じて新たな資源を掘り起こしたりしていても不思議ではない。そして仮にそうした状況が観察できるのであれば、チャリティ財源の多様性は、数百年におよぶチャリティのしぶとさをあらわしているとは言えまいか。また同時に、この多様で柔軟なチャリティ財政のあり方は、「ボランティア団体」の収入の多くが「善意」の寄付でなければならぬというわれわれの思い込みや、「ボランティア団体」が収益をあげることに眉をひそめがちなわれわれの態度を、考え直すきっかけにもなろう。

以上、本書を読んで感じたところを述べたが、重箱の隅をつつくような指摘になってはいないかと危惧する。また、評者の力量による誤読や見落としてもあるかもしれない。著者である金澤氏にはご海容を願うとともに、本書により、著者の歴史観や人間社会に馳せる思いに深く触れる機会を与えてくれたことを感謝したい。そして、研究者に限らず、人間の歴史と今、そしてこれからに関心を抱く多くの人々に本書をぜひ手にとってほしいと願う。

## 注

- 1 なお、「チャリティ」とは「慈善、すなわち国や地方自治体ではなく民間で、通常の経済活動とは異なり非営利的に行われる、さまざまな「弱者」を救済する活動」(iv頁)と説明される。
- 2 「ある時代のある地域における福祉の複数のオプションの組み合わせ」(32頁)を言う。
- 3 なお、2008年の前作第二章「近代国家とチャリティ」第四節「慈悲深いイギリス」は帝国とチャリティに言及しており、おもにチャリティと現地政府との共犯関係について論じられている。これは国内におけるチャリティの性格を相対的に捉えるために用意されたものであり、今作における意図とはやや異なるように思われる。
- 4 もちろんこの留保は、歴史家としての著者の公正さを示すものであることは言うまでもない。